

唯識著「令和版・学問ノススメ」大機小機 日本経済新聞 2019年8月31日(土)朝刊を読む

1. (1)日本は資源の少ない島国だが人的資源だけは豊富だ。それが明治維新以降の目覚ましい発展や、戦後の高度成長を可能にしてきた。  
(2)もちろん、資源というからには、質が高くなければならない。江戸時代の寺子屋教育以降の伝統を受け継いだ歴代の政府の教育政策が、豊富な人的資源を涵養(かんよう)し、育ててきた。  
(3)最近、それに黄色信号がともっている。高校の中間層の学力の「地盤沈下」が心配されるようになっている。
2. (1)中堅進学(高校)の生徒は、スマートフォン片手に、1日30分以下の学習時間を良しとし、無理のない進学を心掛けるようになっている。  
(2)1週間に、5時間以下の学習時間という、ほとんど学習しない(大)学生の割合は、米国では7人に1人なのに対し、日本では3分の2に上っている。  
(3)ケインズによれば、経済成長をもたらすのは「アニマルスピリット」だという。その基本は若いころのしっかりした勉強だ。
3. (1)福沢諭吉の「学問ノススメ」は、「天は人の上に人を造らず」という言葉で有名だが、それに続いて、それなのに世の中には人の上に人がいて、人の下に人がいる、その違いは学問をするかしないかだ、だから、みんな学問に励めとしていたのだ。  
(2)「学問ノススメ」は300万部も売れた。人口が3000万人だった時代のことである。多くの人が小学校にも行けないような時代にそれだけの人が読んだのだ。  
(3)江戸時代の寺子屋教育の伝統が、中間層の強い向学心を支えていたといえよう。それが今、失われている。
4. (1)ではどうしたらいいのだろうか。  
(2)かつては、企業が社内教育でそれを補っていた。しかしながら、選択と集中の時代に、そんな余裕のある企業は少ない。  
(3)となると、無理しない程度の勉強で社会に出てから学問の大切さに気付く多くの人々を、しっかり教育しなおす仕組みを、新たに作り直すしかなかなかろう。政府の応援が必要だ。

#### <コメント>

1. (1)日本経済新聞の経済コラム、「大機小機」から学ぶことは、毎回多い。政府の果たした役割は確かに大きい、民間教育機関の果たした役割も大きい。  
(2)「無理しない程度の勉強で社会に出てから学問の大切さに気付く人々」を、一人でも減らすことが、我々のできることだと考える。  
(3)社会に出る前に、否、大学に入学するまでに、自分から進んで学ぶ力、主体的に学ぶ力、自己学習能力を育成することこそが、我々学習塾の「社会的使命(ミッション)」と確信する。

2. (1)大学の役割として、評価を厳格、学力不足の学生に単位を出さないこと、卒業させないことが求められる。高校時の学力が不足している学生には、大学入学後リメディアル教育を徹底すること、勿論だ。  
(2)高校の使命は、学力不足のまま生徒を大学に送り込まないことだ。大学入試に出題される教科や分野のみ学べばよいという教育は、一切中止すべきだ。  
(3)企業は、規模の大小にかかわらず実力不足の社員の存在は、企業の命運を決するので、能力強化に励むしかない。
  
3. (1)政府や自治体は、社会に出てから実力を身に着けたい人のために、コミュニティカレッジや、公共図書館の「学習スペース」を、大いに奨励することだ。  
(2)以上の実行には政府や自治体からの追加の税金の投入は、一切不要。予算の範囲内で、NPOやボランティアなどを最大活用することで、実行すればよい。  
(3)すべての学習者が「自覚をもって学ぶこと」、アクター(教育の担い手)が「自らの使命を果たす」だけで十分だ。皆様は、どうお考えですか。

2019年9月1日(日)

林 明 夫